

メディアにおける音声から映像への変容と、

その相互依存性

—トーキー映画移入期における各メディアの変化—

平成 16 年度入学

文学部人文学科人間科学コース

社会学・地域福祉社会学

平成 20 年 1 月提出

要約

本論では、メディアの変容が既存のメディアにどういった影響を与えるのか、特にトーキー映画（映像+音声）の登場が、サイレント映画（映像）とラジオ（音声）に与えた影響を話題にしている。

1章では、70年前の事象を相手にする作業を始めるにあたっての手がかりを探した。その結果、トーキーの導入前と導入後でラジオの嗜好に変化が起こっていたことがわかった。1つは、ラジオ独自の番組への嗜好が高まったこと、もう1つは歌謡曲への嗜好が高まったことである。2章、3章ではこの2つの変化を手がかりにして、その変化を取り巻く状況を明らかにしていった。

2章では、映画・ラジオの内容の面での変化を追った。映画に関しては音声を得たことでその喜劇の内容に変化が見られた。映画の内容は、音声を得たことを生かすものへと変化していき、映像のみであったサイレント時代の喜劇は奮わなくなっていった。ラジオと映画の間での、喜劇に関してメディアの特質を理由にする内容の移動はなかったが、映画単体で見たときメディアの特質に沿う形でその喜劇の内容が変化していくというのは、興味深い。また、トーキー化が生んだ副産物といえることなのだが、トーキーの時代を迎えて映画界からラジオ界への人の移動が起こった。それは、活動弁士と呼ばれた人の移動であったのだが、このことがラジオでの喜劇の増加を生んだ。

3章では、歌謡曲を通じて関わりを強めていく映画とラジオの様子を確認した。トーキー化と時期同じくして、ラジオ・映画の利用者数が急増している。映画・ラジオ・レコードというのは深い関わりの中にあっし、それぞれはいろんな要素で結びついていたようである。そのため、映像+音声という映画のメディアの性質がラジオ・映画の利用者数の増加につながったとは言い切れなかった。ただ、トーキーの時代を迎え、映画とラジオの関係が強まったことは確かであった。

4章では、本論を通じて発見した「コンテンツはメディアに最適な形に変化していく」というモデルが他のメディアにも適用できるのか、その可能性について記し、本論をとじた。

目次

はじめに	1
1章 トーキー移行期におけるラジオの聴取希望の変化	2
1節 ラジオの登場、映画の登場について	2
(1)サイレント映画の登場(1899~) (2)ラジオの登場(1925~) (3)トーキー映画の登場(1931~)	
2節 聴取希望の変化から見る、ラジオの役割の変化	3
(1)嗜好調査の内容(調査方法・結果) (2)演劇とラジオの関係の変化 (3)歌謡曲への嗜好の高まり	
3節 本論では、何を指すか	7
2章 トーキー映画とラジオ、それぞれの独自性について	10
1節 トーキー映画移入期における、ラジオ番組内容・映画内容の変化	10
2節 トーキー移入期におけるラジオでの喜劇増加と、映画での喜劇減少について	12
(1)サイレントの時代の喜劇(~1924) (2)ラジオの登場期における喜劇(1925~1930) (3)トーキー移入期における喜劇(1931~1939) (4)喜劇は本当に減少したのか (5)ラジオ喜劇と映画喜劇の関わり	
3節 トーキー化は、ラジオと映画の内容に何の影響を与えたか	18
(1)メディアの変化と人の移動、メディアに最適な形に変化するコンテンツ (2)トーキー化は、映画・ラジオ間での内容の移動をもたらしたか	
3章 歌謡曲を通じてのラジオ・映画の結びつき	21
1節 小唄映画の時代と映画主題歌の時代	22
(1)小唄映画と映画主題歌 (2)レコードとラジオ、映画の関わりについて	
2節 トーキー化と、レコードの売り上げ枚数の増加について	27
(1)サイレント時代 (2)トーキー時代	
3節 トーキー化は、映画とラジオの間にどういった変化をもたらしたか	33
4章 トーキー時代のメディアの変容モデルと、他メディアへの適用の可能性	34
1節 メディアに最適な形に変化するコンテンツ	34
(1)放送メディアの変化と、放送内容の変化	
おわりに	35
参考文献・資料	36